

京都の中学生におすすめの四万十町を巡る修学旅行プランをプレゼンテーションしよう

～資料や機器を用いて、旅行プランの魅力や良さを伝え、聞き手が行きたいと思うように話し方の表現を工夫する～



発行
令和3年1月
中部教育事務所



授業者 平林 香里 教諭(四万十町立大正中学校) 教材 「説得力のある提案をしよう」(東京書籍「新しい国語2」)

単元で目指す資質・能力/言語活動

- ・話し言葉と書き言葉の特徴について理解することができる。【(1)イ】
- ・自分の立場や考えが明確になるように、根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫することができる。【A(1)イ】
- ・資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができる。【A(1)ウ】

本単元では、ゴールを「京都の中学2年生におすすめの四万十町を巡る修学旅行プランを提案する」とし、目的を明確にすることで、構成を工夫したり効果的な資料の示し方や機器の用い方をしたりする必然性を、生徒に明確に持たせた。具体的には、実際に京都の中学生にアンケートを実施し、相手のニーズを理解したうえで、四万十町を1日かけて満喫できるような修学旅行プランをオンラインでプレゼンテーションする、というものである。資料や機器を活用して、話の要点や根拠を明らかにするなどして聞き手に分かりやすく伝えるだけでなく、話し言葉と書き言葉の特徴を理解し、視覚に訴えるためには端的にまとめた表現が効果的であることや、聴覚に訴えるためには重要な言葉や伝えたい事柄について繰り返し表現することなどが効果的であることなどに気づかせることを目指した。

単元計画(全7時間)

題材の設定、情報の収集、内容の検討

(2時間)

1. 学習のめあてやゴールイメージをつかみ、学習の見通しをもつ。既習を振り返るとともにグッドモデルを示し、良いところや取り入れたいところを確認する。
【社会科で京都府(宇治市)と高知県(四万十町)の地理や歴史、特産品などそれぞれの特徴や魅力を確認する。】
2. アンケート結果を基に提案内容を個人で考える。

構成の検討、考えの形成(3時間)

3. グループで提案内容を集約し、聞き手のニーズを捉えて話す事柄の順序等を検討し、構成表を作成する。(伝えたいことにふさわしいテーマをつけ、テーマに沿ってプランを組み立てる。)
4. 効果的に資料や機器を用いるために構成表に加筆する。
5. 発表練習を行い、話し方や資料の提供の仕方などを考える。

表現、共有(2時間)

6. (本時) 互いの発表練習を聞き、話し言葉の特徴や話し方についてアドバイスや参考になるところを挙げ全体で共有する。
7. 京都の中学生にZOOMでプレゼンテーションし、評価してもらう。表現の工夫などについて、単元の振り返りをする。

本時の展開 **本時の目標** 資料や機器を効果的に活用し、自分達の思いや考えが聞き手に分かりやすく伝わるプレゼンテーションになるよう、アドバイスをもとに話し方の表現などを工夫する。

学習活動	指導上の留意点(◇予想される生徒の反応)
1 前時の学習を確認し、本時のめあてを提示する。	・聞き手は京都の中学校の生徒であること、今まで学習してきた評価のポイントに沿って表現を工夫して話すことを確認する。
2 プレゼンテーションを聞き合い、クラスで考えた評価のポイントを踏まえ、他のグループにアドバイスする。	・伝えたい内容が効果的に伝わるか、また、実際に行ってみたいと思える内容になっているのかという観点に沿って、班で評価する。ふせんはポイントごとにグループ分けして貼る。また、プレゼンテーションのテーマも予測し、ふせんに書いて貼る。
3 他の班からのアドバイスを聞き、プレゼンテーションの表現や内容を再検討する。 ・発表用の原稿に、聞き手に伝わりやすい表現や、資料や機器の活用の仕方について、アドバイスをもらって変更した点や改善したことなどを記入する。また、テーマとプラン内容の結びつきも確認し、適切な結びつきに修正する。	◇パワーポイントにテーマの「四万十町の雄大さ」が分かるフレーズを追加すると、さらに効果的に話が伝わるかもしれない。 ◇四万十町は食べ物もおいしいのだから“食べて遊んでまるごと四万十”の方がいいんじゃない。実物の生姜も持ってこようよ。 ◇アンケートからは、自然とのふれあいが少ないことが伝わってくる。だから、“自然のパワースポット”という言葉を話の中で繰り返すとともに、パワーポイントの中にも、写真とともに端的な見出しをつけておこう。
4 本時を振り返り、次時の見通しをもたせる。	・本時で分かったこと、本番に向けて意識して取り組みたいこと、本時の学びをどのように生かしていくかを書く。

教材研究会のポイント

プレゼンテーションで論理的な表現力を育成するために

東京女子体育大学教授
田中洋一先生より

1 話す「相手・目的・場」を適切に設定して内容や表現を工夫させる

「話すこと・聞くこと」の授業では、相手や目的、場を適切に設定して生徒に目的意識を明確にもたせ、内容や表現を工夫させることが大切である。相手・目的・場については右下のように考え、相手が知らない情報を選別することで、話し手が伝えたい情報を決定することができる。本単元で言うと、どんなプレゼンテーションにすると良いのか(感情を込めてスピーチするのか、敬体で話すより親しみを込めて常体で話す方がよいのか等)より深く考えることができる。また、目的に応じた発言の仕方をするために、提案する時に、自分の提案の長所と短所の両方を言うことも考えられる。

相手⇒話し手より情報量が少ない相手
目的⇒基本は「やってみよう」と相手に思わせること
場⇒会場の広さ、直接かオンラインか、集団か個別か

2 相互評価に具体性をもたせる

生徒同士で相互評価を行う場合、評価に具体的な内容をつけると行いやすい。まずメインの評価ができていないかどうかを考え、できていないなら、メインの評価につながる具体的な評価を、と段階をつけて考えていく。そうすることで、生徒自身がつけていく力の到達度を把握しやすくなり、教師が学習評価として見取る場合も適切な材料となり得る。

主の評価 ☆プレゼンテーション全体を通して京都の中学生が実際に体験したい、行ってみたいと思えるプラン内容であったか。

具体的な評価

- 自分の考えが分かりやすく伝わるように、書き言葉の特徴を捉えた表現の工夫をした資料を活用できていたか。また、機器を効果的に活用できていたか。
- 提案のテーマとプランの内容が適切に結びついてきたか。
- 聞き手を引き付ける話し方ができていたか。(話のテンポ、間の取り方、声の大きさ、言葉の繰り返し、ジェスチャーなど)

授業研究会のポイント

1 系統性、他教科等とのつながりを意識して見方・考え方を成長させる

国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくため、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習することで、見方・考え方の成長が図られていく。そして、国語科で身に付けた見方・考え方は、国語科の授業だけで活用していくものではなく、それぞれの教科等との学びとも相互に関連づき繋がりが合っている。本単元ではプレゼンテーションを学習したが、たとえば総合的な学習の時間や特別活動など、他教科等の学びの中で提案をする機会がある場合、その学習の中で聞き手の興味や関心、情報量などを把握したり、自分の主張と根拠である資料の関係を考えたりするような見方・考え方が重要になってくる。国語科で成長させた見方・考え方をそれらの学びに生かすことで、さらに見方・考え方を成長させていくことが大切である。

2 育成を目指す資質・能力に即した効果的なICT活用

本単元での重点指導事項が「資料や機器を用いて自分の考えを分かりやすく伝わるように表現を工夫すること」であったため、伝えたい旅の魅力のテーマに沿った要点や根拠を明らかにしたり、テーマの中心となる事柄を強調したりするためにプレゼンテーションソフトを用いた。その中で話す言葉と、資料に書かれている言葉とのつながりを考えることで、自分の考えの根拠としてふさわしいかどうか検討したり、書き言葉の特徴を生かして資料を作成することで、伝えたい内容を適切に伝えるためにその資料や機器が有効かなどを考えたりする力をつけることができた。これは、「話し言葉と書き言葉の特徴について理解する」という知識及び技能の力を身に付けることにもつながった。

